

シェールガス革命

福島事故の直後はみんな「反原発」と言っていたのに、いつのまにか「脱原発」になってしまった。「反」は行為の意志の接頭語であるが、「脱」は経過の接頭語だ。原発は、いずれ止まらざるをえないから、主張するのなら断固として即停止の「反」原発でなければ意味がない。事があると、看板やスローガンの枝葉末節にこだわり、それが運動そのものになりかわってしまうのが日本の特徴でもある。だから、変革のモーメントは、いつも黒船のように外からやってくる。

*

脱原発などが無意味になる事態がいま（例によって）海外で起こっている。「シェールガス革命」である。「革命」という言葉が体制側から公然と発せられるようになったのは、ロナルド・レーガンあたりからではないかと思うが、いろいろな「革命」が喧伝されたのち、いまアメリカで言われているのが、岩盤の深部に広がるシェール層から回収されるシェールガスによるエネルギー革命である。これによってアメリカは、エネルギーを外部に頼らずに自給自足できるという。たしかに、そうなれば革命的な事態である。

*

この動きは、すでにエネルギーの方式に影響をあたえはじめ、エネルギーはガスというトレンドが急速に強まっている。世はガスの時代になるのだ。ガスといってもさまざまで、

日本で使っているのは、液化天然ガス（LNG）が主で、これは、船で海外から運ばれて来る。液状になっているから、石油や石炭と同様、比較的安全に運搬ができるが、その代わり、運搬経路つまりシーレーンの確保が必要になる。逆に言えば、もし運搬経路が絶たれてしまえば、使うことができないということでもある。日本の石油運搬の保安は、いまはアメリカ軍の警備に頼っている。

*

早晚、日本でもシェールガスを掘ろうという動きが盛んになるかもしれないが、地下3000メートル以上も掘る「水圧破碎」（ハイドロリック・フラクチャリング／略してフラッキング）の技術とノウハウはアメリカが独占しており、そう簡単にはシェールガスを手に入れることはできない。だから、日本は、いずれガスの時代に乗り移るとしても、パプアニューギニアやオーストラリアからLNGを輸入するという外部依存にとどまり、シェールオイル革命には追いつけないだろう。悪くした場合、いまや時代遅れになりつつある石油の腐れ縁的購買者になるか、最悪の場合、原発しか自給自足の方法はないと自暴自棄的な選択にはまる恐れもある。

*

尖閣列島をめぐる最近の動きはこのことと関係がある。フラッキングを大規模に展開するには土地が狭い日本には、尖閣列島は恰好の候補になりえた。石原慎太郎と野田政権とのなれあいの末の国有化が急に進んだのも、そんな期待からだだったが、結果はこの地を軍

事的な緊張の高まるエリアにしてしまった。しかし、これは、必ずしも想定外のことではない。むしろ、この緊張は、日本がシェールガスに距離を置き、今後の中東の石油に依存しようとする「反動」路線にはかえって好都合の条件となるからである。アメリカは今後モンロー主義的な傾向を強め、シーレーンの警備は日本の「自主性」にまかせようとするから、この路線で行く場合には、自衛隊の強化は必然的となる。憲法改正を謳う石原総理は、まさにこの路線に向いている。

*

アメリカでシェールガス革命が騒がれているのに、日本ではまだ対岸の火事の趣があるのは、たとえフラッキングの技術が使えても、そう簡単にはガスの時代に突入できない、旧エネルギーとの腐れ縁があるからだ。日本では、発電用も含めてLNG依存が深まっているにもかかわらず、アメリカの5倍以上の価格で入手せざるをえない。石油価格とLNG価格とが連動しているという罫にはまっているからである。しかも、LNGは、今後のガスの時代の主流ではない。陸続きのヨーロッパではパイプラインによる天然ガスの輸入が現実化している。日本では、政治的な理由もあって、ロシアからのパイプラインもまだ引かれてはいない。そういうことを言い出せば、田中角栄や鈴木宗男のように手痛い仕打ちを受ける。ひよっとすると、シェールガス革命は、日本の場合、文化的レベルでしか起こらないかもしれない。

*

シェールガス革命で、当然、世界の政治地図も変わる。アメリカのアラブ離れは、すでに始まっている。エジプトの親米政権が倒れたのは、「アメリカの覇権の衰退」などのためでは全くない。最近のイスラエルとハマスの紛争に対するアメリカの冷めた対応を見ても、中東に対するアメリカの姿勢の変化がわかる。もともと石油でもアメリカは相当量の埋蔵量を持っていたが、中東のオイルを買いたくほうが効率がよかったので、石油による自給自足路線は取らなかつた。が、シェールガスでは一気に路線展開が進む。イランのシャール政権への肩入れ以来、ホメイニのイラン革命の試練、湾岸戦争とイラク戦争のグリーンディナ介入に見られるように、なりふりかまわぬやり方で中東のオイルを保持しつづけたが、そのコストは安いものではなかつた。だから、第2次オバマ政権は、カナダとの連携を強めながら、他国に対し距離を置くスタイルを強めていくことが予想される。

*

しかし、アメリカは、基本的に、**自国で主流なことを世界化することがデモクラシーだとするグローバリズムのカルチャー**から逃れられないので、今後、シェールガスの技術とその「文化」を輸出しはじめるとも確実だ。いま現在でも100年間自給自足できるシェールガスの蓄積があるらしいが、備蓄が過剰になれば、新たな輸出商品となるだろう。現在のところは、LNGと違って、シェールガスの移動にはコストがかかるらしい。面白いことに、日本の東レが開発した炭素繊維が、高圧ガスを移動するためのタンクの壁材によいというので、「シェールガス向け出荷」が進

んでいるという。炭素繊維が、タンクの壁の厚さの軽減に役立つというのだ。いずれにしても、エネルギー源をガスに集約して行く動きが急テンポで進んでおり、原発も石油ももはやエネルギーの主流ではなくなりつつある。

*

しかしながら、ガス時代によって、石油や原発は“脱”落するとしても、高エネルギーをよしとする産業や生活のスタイルと価値観は全く変わらないのだから、これまでのエネルギーが露呈した自然や生体の破壊という問題は、改善されないどころか、悪化する可能性が高まる。シェールガスのフラッキングでは、化学物質を含む大量の水を使うために、水源の枯渇や水質の汚染を招く。地下3000メートル以上も深く穴を掘るため、**地震を誘発する危険もある**という。現に、アメリカでは、いままで起こらなかった地域で地震が起こり始めているのは、シェールガスの水圧破碎と関係があるのではないかという議論がある。ガスが主要なエネルギーになれば、生ガスの爆発事故も起こるだろう。そういえば、2011年にドイツとイギリスの共同制作で作られた映画『**ヒンデンブルグ 第三帝国の陰謀**』は、1937年に起こった実際の事故を推理したものだが、作中CGIによって非常に効果的に表現されるヘリウムガスの爆発の凄まじいシーンは、今後のガス時代に起こりうる事故のいかなるものであるかを想像させる。それは、原発や石油コンビナートの事故より安全とはいえない。もし、世界中でフラッキングが流行したら、地球は地震頻発の惑星と化すかもしれない。

*

その点でヨーク・オノはあいかわらず鋭い。シェールガス田開発の危険性についてはすでに多くの警告と批判があがっているが、アーティストとして公的な批判を表明したのは彼女が初めてであろう。2012年8月、ヨーク・オノと息子のシヨン・レノンは、「アーティスト・アゲンスト・フラッキング」(Artists Against Fracking)を組織し、記者会見を開いて、「クラッキング禁止」を表明した。当面、声明は、環境や生体の破壊の危険性への警告にとどめられているが、当然、**高エネルギー依存のライフスタイルへの批判も考慮に入れてははずだ**。ヨークがどう考えているかは別として、シェールガス時代の社会と生活がどう変わるかは、想像に難くはない。

*

各家々やコミュニティ単位での自律を可能にするソーラーパネルと異なり、ガスは、依然として**中央集権的なエネルギー**である。巨大で高度な技術で管理された中央からパイプやタンク／ボンベで配給されるしかないからだ。その結果、中央集権化は維持される。これにともない、組織の分権化は後退し、官僚制は温存される。国家の権力形態は後退こそすれ、新しくはならない。これは、現在の支配者階級にとっては好都合である。70年代に自動車からコンピュータにシフトした産業は、今後**化学工業**にシフトするだろう。ガスは、石油よりも化学工業にとって効率のよい原料を提供する。その結果、さまざまな**人工物**が増殖し、ガラスやプラスチックに代わる新素材

が多数開発される。3D映画も、いまの平面スクリーンではなく、ガス状のポリモーフィスなスクリーンがホログラフィーよりももっと生々しく実物そっくりの映像を現出できるようになるだろう。

*

エネルギーの変化はさまざまなメタファーを生む。自動車の時代には、「ブレーキを踏む」と言えば、何かを停止することであり、コンピュータの時代には、「リセットする」とは再開の行為を意味した。いまだに、余力をつけるという意味で「充電する」などという電気時代の言葉が使われたりもする。その殿で、ガスの時代には、「充滿」とか「漏れる」とか「排気」といった表現が流行るかもしれない。ジョゼフ・ゴードン・レヴィット主演の『LOOPER／ルーパー』によると、2072年のドラッグは、目に指す方式になるらしいが、来るべきガス時代のドラッグは、鼻か口へのスプレー方式となるかもしれない。ナチス時代にトレンディだったガス室も復活するかもしれない。都市も室内も、加工されたさまざまなガスだらけで、ピュアな空気を吸うには、いまペットボトルで水を買うようにわざわざ購入しなければならなくなるかもしれない。

*

喫煙の前提には**空気の共有**という文化があった。禁煙の亢進は、空気を共有すること人々が距離を取ったことを意味する。あんたの臭いは臭ぎたくないよというわけだ。実際、昔の喫茶店やバアでは、タバコの煙で1メー

トル先が見えないこともあった。そこへ行けばいやおうなしにタバコのおい（臭い／匂い）を嗅がざるをえない。それを許容ないしは歓迎できたからこそ、タバコは流行ったのだった。だから、いまだにタバコを吸っている人は愛すべき人なのだ。しかし、ガスの時代には、何らかのガスを共有する傾向が復活するだろう。と同時に、ノイズキャンセラーのように、においのキャンセラーも登場するだろう。が、嫌煙のようなある種の「利己主義」が浸透すると、あとにはもどれない。ガスの共有は復活するかもしれないが、共有を拒否する層はより厚くなる。だから、その新たな「共有」は、**自覚しない勝手な共有**という形になる。ケータイの文化はそのヒントになるだろう。

*

管理や政治も、ガスの特性に合わせて変化する。放置すれば拡散するガスの管理は適度の封じ込めと**カプセル化**となる。これは、解放よりも**閉鎖の政治**を必要とする。放っておけばあぶないという観念はエスカレートし、予備工作的に閉じ込めることがあたりまえとなる。逆に、閉鎖空間のなかであれば、どう行動しても邪魔されないと**いう疑似アナーキー**な観念もあたりまえになる。これは、ゲッターのなかの逆説的自由のようなものを保証するかもしれない。国単位、コミュニティ単位、個人の意識内の単位の間では「自由」が広がる。それは、ある種の「**鎖国文化**」という形を取る場合もある。個々人の意識の場合、他者性を欠いた**自閉症的自我**が主流となる。彼ないしは彼女は、他者を生身の他者からではなくて、自己自身から分泌するとい

うエーリアン方式によって維持する。ガスの時代は、既存の観念のゆるもどしが主で、特に新しい要素は当面想像できない。